

京都三大祭りの葵祭のヒロインは齋王代と報道されるが、その齋王とは？
葵祭の正式な名称は賀茂祭。主役は勅使。宮中の儀、路頭の儀、社頭の儀からなる。

未婚の皇女の内から卜定（ボクテイ）した。賀茂齋（いつき）内親王とも言う。
有智子内親王より禮子内親王まで35代続いた。

古代の齋祝子（さいご）は賀茂氏の女性。阿礼乎度女（売）
御阿礼祭、玉依姫の役割（神婚、神の妻）
紫野齋院：船岡山の南、七野神社の辺り。最近に碑が建てられた。

カモ系図に見る齋祝子（さいご）

久治良の時 齋祝子淨刀自女
小治田朝***岡本朝飛鳥板蓋朝殿寮***難波長浦朝祝仕奉
齋祝子淨刀自女合七年、右人時神戸十四烟神田一町八畝丁**
**年充奉（大化当時の祝）

皆麻呂の時 齋祝子真吉女
奈良朝祝仕奉齋祝子真吉女 起和銅三年庚戌 迄三年
（愛宕郡賀茂郷岡本里戸主 賀茂県主皆麻呂）

国島の時 齋祝子麻都比女 又継虫女
祝仕奉齋祝子麻都比女又継虫女二度、起天平十八年丙戌年
迄天平宝字二年 合十二年
又禰宜仕奉、起天平宝字二年 合十二年、
又禰宜仕奉、起天平神護三年丁未年 迄天応二年仕奉、
右人時有勅以宝龜十一年四月 令把笏禰宜祝給之

山城の国の風土記逸文

(賀茂社)

山城の国の風土記に曰く、可茂の社。可茂といふは、日向（ひむか）の曾の峯（たけ）に天降（あも）りましし神、賀茂建角身命、神倭石余比古の御前に立ちまして、大倭（やまと）の葛木（かづらき）山の峯に宿りまし、そこより漸（やくやく）に遷（うつ）りて、山代の国の岡田の賀茂に至りたまひ、山代河の随（まにま）に下りまして、葛野河と賀茂河との会うところに至りまし、・・・・賀茂建角身命、丹波（たには）の国の神野の神伊可古夜日女にみあひて生みませるみ子、名を玉依日子と曰ひ、次を玉依日売と曰ふ。玉依日売、石川の瀬見の小川に川遊びせし時、丹塗矢、川上より流れ下りき。すなはち取りて、床の辺に挿し置き、遂に孕みて男子（をのこ）を生みき。人と成る時に至りて、・・・・外祖父のみ名によりて、可茂別雷神と号（なづ）く。いわゆる丹塗矢は、乙訓の郡（こほり）の社に坐（いま）せる火雷神（ほのいかつちのかみ）なり。可茂建角身命、丹波の伊可古夜日売、玉依日売、三柱の神は、三井の社に坐す。

（『釈日本紀』巻九）

(賀茂乗馬)

妹（いろせ）、玉依日子は、今の賀茂県主等が遠つ祖なり。其の祭祀（まつり）の日、馬に乗ることは、志貴島の宮に御宇（あめのしたしろ）しめしし天皇（すめらみこと・欽明天皇）の御世、天（あめ）の下国挙（こぞ）りて風吹き雨零りて、百姓（おほみたから）含愁（うれ）へき。その時、卜部、伊吉（いき＝壱岐）の若日子に勅してトへしめたまふに、すなはちトへて、賀茂の神の崇なりと奏（まを）しき。よりて四月（うづき）の吉日（よきひ）を撰びて祀るに、馬は鈴を係け、人は猪（しし）の頭を蒙（かがふ）りて、駟馳（は）せて、祭祀（まつり）をなして、能くねぎ祀らしめたまひき。よりて五穀（たなつもの）成就（みの）り、天（あめ）の下豊平（ゆたか）なりき。馬に乗ることここに始まれり。

（『本朝月令』所引「秦氏本系帳」）

(三井社)

また曰はく、蓼倉の里、三身の社。三身といふは、賀茂建角身命、丹波の伊可古夜日女、玉依日女、三柱の神のみ身坐す。かれ、三身の社と号（なづ）く。今は漸（やくやく）に三井の社といふ。

（『釈日本紀』巻九）

『朝野群載』卷十二にみえる平安期の賀茂祭宣命書様の「アレヲトコ・アレヲトメ」
賀茂祭

天皇（すめらみこと）が御命（みこと）に坐（ま）せ、掛けまくも畏き皇太神（すめおほかみ）に申（まを）し給はく。太神の助け給ひ護り賜ふに依りて、天皇朝廷（すめらがみかど）は平く大坐（おほまし）て、食国（をすくに）の天下（あめのした）、事無く有るべしと為（し）てなむ、常も進（たてまつ）る宇都（うづ）の大幣（おほぬさ）を、内蔵頭（くらのかみ）（もしくは助）[位姓名]に 捧持（ささげもた）しめて、阿礼ヲトコ（乎止己）・阿礼ヲトメ（乎止女）・走馬（はしりうま）、進（たてまつ）らると申（まを）す。

某年四月 日（中西日）

忌子（いご）： 齋院廃止後、忌子を置く。女性の神職（賀茂氏人の女子）。明治に廃止。

齋王の和歌等

第1代 有智子内親王（嵯峨天皇第八皇女、弘仁元年（810）卜定）

この内親王は文才に優れていた。嵯峨天皇が齋院に行幸になったとき、齋院の詠まれた漢詩

寂々幽荘迷樹裏 仙輿一降一池塘
棲林孤鳥識春澤 隱潤（澗）寒花見日光
泉声近報新雷響 山色高晴陰雨行
從此更知恩願渥（渥） 生涯何以蒼穹蒼

寂々たる幽荘樹裏に迷ふ、仙輿一たび降る一池塘。
林に棲む孤鳥春澤を識り、澗（たに）に隠るる寒花日光を見る。
泉声近く報ず新雷の響を、山色高く晴れ 陰（かげ）雨行。
此より更に知る恩願渥きを、生涯何を以て穹蒼に答へむ。

4 慧子（恵子）内親王（文徳天皇第八皇女）嘉祥3年（850）卜定

「母に過失があった」という理由で齋院を交替されようとしたが、その無実が判明したのでとりやめになった。その時 「あま敬信」（宮廷女官）が詠んだ歌

「おほぞらを てりゆく月し きよければ くもかくせども 光けなくに」

（古今和歌集）

歌意：「大空を照らす月は、まことに清く明るいものですから、一時、雲が隠すことがあ

りまして、けっしてその光は消え果てはいたしません。あなたさまも何事にも災いされぬ、きよらかなお育ちのお方でいらっしゃいます。」(奥村恒哉校注『古今和歌集』、新潮日本古典集成)

『文徳実録』 天安元年(857)二月丙申(28日)条に

「鴨齋内親王慧子ヲ廃ス 更テ無品述子内親王ヲ立テ、齋ノ内親王ト為ス、右大臣正三位藤原朝臣良相ヲ神社ニ遣シ、事ノ由ヲ告グ、其事秘者、世無知之也」

とあり、廃位の理由が明らかにされていない。

慧子内親王と同母の晏子内親王(文徳朝の伊勢齋宮)には及んでいないので、「母の過ち」説には疑問がある。晏子内親王は文徳天皇崩御の天安二年(858)退下。

山口博氏(『王朝歌壇の研究』昭和57年)によると、「意図的な政治的な臭いを感じる」と紀氏の動向に注目。述子内親王(紀静子所生)にともなって採用された新齋院長官は紀冬雄。

慧子内親王の母は、従四位上藤原是雄の女列子であるが、列子の母は明らかでない。ただし、藤原是雄の息、利貞の母として「百濟永哲女」とあるので、利貞と同母であれば、百濟氏系の女性ということになる。

10 君子内親王(宇多天皇第十皇女)寛平5年(893)卜定

君子内親王賀茂の齋院におはしましける時、菊の花につけて奉らせ給ひける
宇多天皇の御製

①「ゆきて見ぬ人の為にと思はずば たれかをらまし庭の白菊」(『続古今和歌集』)

君子内親王の返歌

②「我がやどにいろおりとむる君なくば よそにもきくの花をみましや」(『大和物語』)

寛平7-8年(895-6)秋頃の作と思われる。(所氏の所見)

③おなじえ(枝)を わき(分)て しも(霜)置く秋なれば

光もつらく おもほゆるかな 内親王(大和物語)

「同じ姉妹でありながら、私だけ差別扱いをされますのは、父君の御愛情まで恨めしく思われます。」(体系本校注者の阿部俊子・今井源衛の歌意)

④花の色をみてもしりなむ はつしもの 心ゆきては を(お)かじとぞ思ふ

「春になってどの枝も同様に美しく咲く花の色を見ても分かるでしょう。初霜にはわけへだてするつもりは、少しもないということが」 天皇(大和物語)

⑤わだつみの深き心は をきながら うらみられぬる物にぞありける

「海のように深い愛情を持っているのに、不公平だと恨まれてしまったものだ。」

天皇（大和物語）

14 婉子内親王（醍醐天皇第七皇女）承平2年（932）卜定（賀茂注進雜記）

- ①千早振神も知りにきゆふ禰 しめの程かくはなれざらなん 藤原清正
清正が齋院長官を務めていたときの歌と思われる。
天歷三年（949）二月に齋院長官を兼ねている。

- ②かじふれば我が身に積もる年月を 送り迎ふと なに急ぐらん
（齋院の屏風歌、兼盛、拾遺和歌集）

- ③このうらのしづくにぬれむ山みちを こえてもゆかむ君かあたりは
御返し齋院

- ④あしびきの山のしづくはしげくとも たのみてまつは もらさざらなむ

齋院から

- ⑤にごりつつ影みへがたき沼水も 今は汀に さやかなりとか
返し

- ⑥うき名 をしながしてしかば 水の面に さやけきかげも かひなかりけり
⑤-⑥ 師輔集

あま 齋院

- ⑦なみだながら そでぞぬれぬる海人小舟 のりおくれたる わが身とおもへば

- ⑧ゆく舟の たちもとまらぬこのしたに いかなるあまか ながめかるらん

⑦-⑧ 古今和歌六帖

婉子内親王の齋院在任期間は長く、承平元年（931）十二月卜定、朱雀天皇御譲位にも退下なく、村上天皇の康保四年（967）5月まで、実に35年6ヶ月の長きにわたった。

15 尊子内親王（冷泉天皇第二皇女）康保5年（968）

3歳で賀茂齋院に卜定

祖父一条太政大臣藤原伊尹の歌

「ちはやふる いつきの宮の庭の松 いくらの千代を とどめかぞへむ」（『元輔集』）

母懷子（33歳）の死により齋院を退下（10歳）その後、叔父円融天皇の後宮に入る。

(15歳)

賀茂齋院から后妃への例：

後一条天皇朝の17馨子内親王（後三条天皇皇后）、
白河天皇朝の22篤子内親王（堀河天皇中宮）など

尊子内親王はその後、母方の叔父藤原光昭の卒去により俄に内裏を退出され、寛和元年（985）出家、その年に20歳で逝去。

齋院退下後、仏門に入られた内親王は多い。

16 選子内親王（村上天皇第十皇女）天延3年（975）卜定

（円融、花山、一条、三条、後一条の五代、57年間在任）

齋院在任中、釈教歌55首を作り、『発心和歌集』一卷を残している。

齋院の最大の公的任務は四月の賀茂祭に奉仕すること。

和歌に現れた神事関係の用語

賀茂祭、臨時祭、御禊（みそぎ）、夏越の祓、相嘗祭、鎮魂祭、難良社祭等。

年中行事の用語

卯杖、子の日、薬玉、七夕、追難等。

齋院より藤原道長のところにりんどうの花が届けられた。（『御堂関白集』）

和泉式部のところへ齋院から瓜が届けられた。（『和泉式部集』）

賀茂の辺りの綿つみや田植などを齋院がご覧になった。（『大齋院前の御集』）

春には殿上人が連れ立って齋院御所へ花見に訪れることも、しばしばであった。

（同前、『大齋院御集』、『玉葉和歌集』）

19 【示偏に某】子内親王（後朱雀院第五皇女）寛徳3年（1046）卜定

生涯に25回の歌合わせを行っている。（その内、齋院在任中は15回）

『栄華物語』に「をさなくおはしませど、歌をめでたく詠ませ給ふ。候ふ人人も、題を出し歌合わせをし、朝夕に心をやりて過ぐさせ給ふ。物語合いとて、今新しく作りて、左右方わきて、二十人合などさせ給て、いとをかしかりけり。」とある。

「谷深く すむ鶯も わがごとや 心にかけて春を待つらむ」永承四年（1049）11歳

「神垣に かかるとならば 朝顔の 木綿かくるまで にほはざらめや」

（『後葉和歌集』）

「隙（ひま）もなく すみれの咲ける しめの中は にひむらさきに 見えわたるかな」
『夫木和歌抄』（巻第六、春部六）

22 篤子内親王（後三条天皇第四皇女）延久5年（1073）卜定。

和歌会、歌合を生涯に十余度開催された。深く仏教に帰依。

「縮向後之寿命 只祈臨終之速証」（『後拾遺往生伝』上）

「兼占雲林院之洞、令作柏城之墳」（『後拾遺往生伝』上）

（退下後堀河天皇の中宮）

24 令子内親王（白河院第八皇女）寛治3年（1089）卜定。92首

高陽院にわたらせ給へるはじめに、人々にいはひのうたよませさせ給ひしに

①いけ水の すむにしらるる ちとせをば きみが心に まかせたるべし

そのうたども申してとおほせられて、関白どの

②このとのの はるかにさかゆ まつの葉の ちよの千とせに いはひこめつつ

御返し

③八千年も すむべきやどの あるじをば よろづ代までも 君ぞみるべき

28 恂子内親王（鳥羽院皇女、卜定後統子と改名）大治3年（1128）卜定。30首

皇后宮齋院にておはしまししとき、故源中納言など人々あまたまいりて、まりのことなどありて、三月つごもりのことにや、まかりかへりしに、ものにもかかたきぶらひしてかくありし

①いかにして たちかへるらむ 神がきに かかれるふぢの いろをみすてて
かへし

②さらぬだに かへるそらなき ゆふざれに むすびとどむる 神がきのふぢ

31 式子内親王（後白河院第十一皇女）平治元年（1159）卜定。42首

「わすれめや あふひを草に ひきむすび かりねののべの 霧の曙」『新古今和歌集』

（在任中の歌）

「ほととぎす その神山の 旅まくら ほのかたらひし 空ぞ忘れぬ」『新古今和歌集』

（齋院時代を回顧しての歌）

35 禮子内親王（後鳥羽院第十一皇女）元久元年（1204）卜定（最後の齋院）

参考文献

- （1）所 京子『齋王和歌文学の史的研究』（国書刊行会、平成元年）
- （2）所 京子『齋王の歴史と文学』（国書刊行会、平成12年）
- （3）井上光貞「カモ県主の研究」『日本古代国家の研究』所収（岩波書店、昭和40年）
- （4）溝江明子『古代日本の祭祀と女性』吉川弘文館（1996）
- （5）『賀茂注進雑記』上賀茂神社（昭和48年、第2版）